

主 題：恐怖から助け出された者の捧げる歌

聖書箇所：詩篇 34篇

テーマ：恐れを前にした時、信仰者はどのように歩むことができるのか

今朝私たちは、タイトルにもあるように“恐怖から助け出された者の捧げる歌”を詩篇34篇のうちから見ていきたいと思えます。ダビデによってこの中に記されたすばらしい歌が一体どのようなものだったのか、いつものようにみことばをお読みしますので、それぞれ追ってみてください。

詩篇34篇 ダビデによる。彼がアビメレクの前で気が違ったかのようにふるまい、彼に追われて去ったとき
 「:1 私はあらゆる時に【主】をほめたたえる。私の口には、いつも、主への賛美がある。:2 私のたましいは【主】を誇る。貧しい者はそれを聞いて喜ぶ。:3 私とともに【主】をほめよ。共に、御名をあげよう。:4 私が【主】を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してください。:5 彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。「彼らの顔をはずかしめないでください。」:6 この悩む者が呼ばわったとき、【主】は聞かれた。こうして、主はすべての苦しみから彼を救われた。:7 【主】の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。:8 【主】のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。:9 【主】を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。:10 若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、【主】を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。:11 来なさい。子たちよ。私に聞きなさい。【主】を恐れることを教えよう。:12 いのちを喜びとし、しあわせを見ようと、日数の多いのを愛する人は、だれか。:13 あなたの舌に悪口を言わせず、くちびるに欺きを語らせるな。:14 悪を離れ、善を行え。平和を求め、それを追い求めよ。:15 【主】の目は正しい者に向き、その耳は彼らの叫びに傾けられる。:16 【主】の御顔は悪をなす者からそむけられ、彼らの記憶を地から消される。:17 彼らが叫ぶと、【主】は聞いてくださる。そして、彼らをそのすべての苦しみから救い出される。:18 【主】は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、霊の砕かれた者を救われる。:19 正しい者の悩みは多い。しかし、【主】はそのすべてから彼を救い出される。:20 主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、砕かれることはない。:21 悪は悪者を殺し、正しい者を憎む者は罪に定められる。:22 【主】はそのしもべのたましいを贖い出される。主に身を避ける者は、だれも罪に定められない。」

さて、この詩篇34篇をこれから見ていくに当たって、まず皆さんに注目してほしいことは、この詩篇にははっきりとした表題がつけられているということです。先週学んだ詩篇33篇には表題がいっさいありませんでした。だからこそ、私たちにはだれがどんな状況の中でそれを記したのかがわかりませんでした。しかし、この詩篇はそれとは違い、だれがどのような歴史的背景のもとで記したのかがはっきりと表題から見て取れるのです。その表題が「ダビデによる。彼がアビメレクの前で気が違ったかのようにふるまい、彼に追われて去ったとき」となっていました。著者は紛れもなくダビデでした。そして彼がアビメレクという王様の前で気が違ったかのように、別のことばで言うなら頭が狂っておかしくなったかのようにふるまい、そこから逃げ去った時にこの詩篇を記したと言うのです。非常にわかりやすい明白な背景が記されていました。でも、ダビデが王様の前でおかしくなったかのようにふるまったことなどあったらどうか、何が原因で彼はそんな行動をとったのだらうと思った人がいるかもしれません。

●歴史的背景：ダビデの抱いた恐れ Iサムエル21章－22章1節

これから詩篇34篇を学んでいくに当たって、著者が一体何を経験して、何を思っことばを綴ったのか、その背景を把握しておくことはとても大切なこととなります。ですから、まず詩篇34篇を見ていく前に、その歴史的背景から少し考えてみましょう。この背景となるダビデの物語についてはIサム

エル2 1章に記されています。少しずつ区切りながら、ところどころコメントを入れて、どんなことが起きているのかを見てみたいと思います。まずIサムエル2 1 : 1の一番頭のところは「**ダビデはノブの祭司アヒメレクのところに行った。**」、こんなふうに始まっていました。ダビデは別に休暇を取ってアヒメレクのところに行ったではありませんでした。彼は、この時、自分に強いねたみを抱いて、そのいのちを取ろうとしていたサウル王様から必死になって逃げている最中でした。ダビデには食糧もなければ、武器もありませんでした。サウル王様やサウル王様から遣わされた使者たちが自分のもとに迫って来る中であって、彼には自分のことを守ってくれる兵士がひとりもない孤独の状態、ノブの祭司アヒメレクのところへと逃げて行ったのです。

そんなダビデがノブの地でアヒメレクに会うのですが、その時のやりとりが「**アヒメレクはダビデを迎え、恐る恐る彼に言った。「なぜ、おひとりで、だれもお供がいないのですか。」**」:2 **ダビデは祭司アヒメレクに言った。「王は、ある事を命じて、『おまえを遣わし、おまえに命じた事については、何事も人に知らせてはならない』と私に言われました。若い者たちとは、しかじかの場所で落ち合うことにしています。**」:3 **ところで、今、お手もとに何かあったら、五つのパンでも、何か、ある物を私に下さい。」**:4 **祭司はダビデに答えて言った。「普通のパンは手もとにありません。ですが、もし若い者たちが女から遠ざかっているなら、聖別されたパンがあります。」**:5 **ダビデは祭司に答えて言った。「確かにこれまでのように、私が出かけて以来、私たちは女を遠ざけています。それで若い者たちは汚れていません。普通の旅でもそうですから、ましてきょうは確かに汚れていません。」**:6 **そこで祭司は彼に聖別されたパンを与えた。そこには、その日、あたたかいパンと置きかえられて、【主】の前から取り下げられた供えのパンしかなかったからである。」**と続いていました。ダビデと出会ったアヒメレクは恐れを抱いていました。恐れを抱きながらダビデに問いかけていたのです。なぜかと言うと、もしかしたらダビデとサウル王様の間に問題が起こっていることを知っていたがゆえに、そんな危険人物と話をし、それをだれかに見られようものなら、自分の身に危険が迫ると考えていたのかもしれない。いずれにしろ、アヒメレクはなぜあなたはひとりでだれもお供がいないのですかと恐る恐るダビデに聞くのです。しごく当然の質問でした。ダビデはサウル王様のむこであり、サウル王様の護衛長でもありました。そんなダビデがひとりであることは余りにも不思議な光景でしかありませんでした。なぜひとりなのですかという問いに対して、ダビデは、いや、実を言うと、自分は王様から内密の命令を受けているのです。自分の部下たち、若い者たちとは別のところで落ち合う予定になっています、だから今はひとりなのだと、うそをついて答えます。ところで慌てて出て来たので、食べ物を持って来ませんでした。よかったらパンでも何かあるものを下さいと、ダビデはうそにうそを重ねてアヒメレクに食べ物を求めたのです。そして彼はアヒメレクからパンを手に入れることになりました。

でも彼が手にしたものはそれだけではなかったのです。続きを読んでいくと、「:7 **——その日、そこにはサウルのしもべのひとりが【主】の前に引き止められていた。その名はドエグといって、エドム人であり、サウルの牧者たちの中のつわものであった——**」:8 **ダビデはアヒメレクに言った。「ここに、あなたの手もとに、槍か、剣はありませんか。私は自分の剣も武器も持って来なかったのです。王の命令があまり急だったので。」**:9 **祭司は言った。「あなたがエラの谷で打ち殺したペリシテ人ゴリヤテの剣が、ご覧なさい、エポデのうしろに布に包んであります。よろしければ、持って行ってください。ここには、それしかありませんから。」**ダビデは言った。「それは何よりです。私に下さい。」と続いています。ダビデに出会ったアヒメレクはパンを渡しました。でも、彼が渡したものはそれだけではなかったのです。実を言うと、ダビデが祭司からパンを受け取っていた時、その様子を目の当たりにしている人物がいました。それはサウル王様のしもべのひとりドエグでした。自分のことを追って来ているサウルの使者であるドエグの姿を目の当たりにしたダビデは、どんなに恐れを抱いたでしょう？だからこそ、彼はアヒメレクに続けて頼むのです。食べ物をもらったところなのですが、ここに剣かやりはありませんかと。王様から内密に命令されて任務に出て来たのですが、それが余りにも急だったので、武器を持って来なかったのです。少し苦しい

言い訳に聞こえますけれども、ダビデはここでもうそにうそを重ねていました。そしてそんな彼は布に包まれて、そこに一つだけ残されていたある剣を手にするようになりました。その剣こそ以前自分が撃ち殺したゴリアテの剣でした。かつてはゴリアテにさえいっさいの恐れなど抱かっていたダビデがここではその剣を手にしなが、サウル王様に対してひどい恐れを抱いて、次の場所へと逃げて行くのです。

そのことが10節のところから続いています。「:10 ダビデはその日、すぐにサウルからのがれ、ガテの王アキシュのところへ行った。:11 するとアキシュの家来たちがアキシュに言った。「この人は、あの国の王ダビデではありませんか。みなが踊りながら、『サウルは千を打ち、ダビデは万を打った』と言って歌っていたのは、この人のことではありませんか。」:12 ダビデは、このことばを気にして、ガテの王アキシュを非常に恐れた。:13 それでダビデは彼らの前で気が違ったかのようにふるまい、捕らえられて狂ったふりをし、門のとびらに傷をつけたり、ひげによだれを流したりした。:14 アキシュは家来たちに言った。「おい、おまえたちも見るように、この男は気が狂っている。なぜ、私のところに連れて来たのか。:15 私に気の狂った者が足りないともいうのか。私の前で狂っているのを見せるために、この男を連れて来るとは。この男を私の家に入れようともいうのか。」22:1 ダビデはそこを去って、アドラムのほら穴に避難した。」と。ひとり孤独で、恐れに支配されていたダビデが次に向かった場所こそ、ガテの王アキシュのもとでした。

ここで皆さんに二つのことを覚えてほしいのです。一つ目は、このアキシュというのが、詩篇34篇の表題に登場していたアビメレクと同じ人物だということです。名前が違うと思うかもしれませんが、でも、“アビメレク”というのは、当時ペリシテ人の王様によく用いられていた称号でした。例えば、ローマの“カエサル”であったり、エジプトの“ファラオ”と同じようなものだということです。ですから、アキシュというのが王様の個人的な名前で、“アビメレク”というのが彼に与えられていた王様としての称号だということです。二つ目に覚えてほしいことは、ダビデがガテの地に逃げたということです。これは非常に興味深いことでした。もっと言えば信じられないことでした。なぜかというと、ダビデが打ち倒したゴリアテの出身地はガテでした。少し想像してみてください。彼は自分が打ち倒したゴリアテの出身地に逃げて行くのです。当然、この町の人々は自分たちの英雄だったゴリアテを殺した人物のことを知らないわけはなかったでしょう。また、彼がもらったその剣のことも町の人にはよく知っていたでしょう。そんな状態でダビデは町の中に入っていくのです。どう思います？いやいや、大丈夫ですかと、余りにも恐れを抱いていた彼は、正気な判断ができなかったのかもしれませんが。どう考えてもこの計画は愚かに思えるものでした。恐れていた事態はすぐに起こりました。町に入ったダビデを目撃した王様の家来たちはその存在に即座に気づき、王様に告げるのです。王様、この人はあの国の王のダビデではありませんか。「みなが踊りながら、『サウルは千を打ち、ダビデは万を打った』」と歌っていたのは、この人ではないですかと。もっと言えば、この人が私たちの英雄であるゴリアテを撃ち殺した人物ではないですかと。そのことばを気にしたダビデは非常に大きな恐れをアキシュ王に抱くのです。当たり前ですよ？自分たちの英雄を殺されたことを覚えているような者、その王様につかまれば、どんなひどい扱いを受けることになるかわからなかったのです。だからこそ、ダビデは捕らえられて狂ったふりをしたのです。彼らの前で、門の扉に傷をつけたり、ひげによだれを流したりしました。そんな姿を目にした王様が口にするのです。この男は気が狂っている、なぜこんな人物を私のところに連れて来たのか、こんな男を私の家に入れようとも言うのか、そんな者は追い出してしまえと。

こうしてダビデはその場を無事に去ることができ、アドラムのほら穴へと避難して行くことになるのです。そして、ほら穴の中で、彼は自分自身の経験した恐れや悲しみ、いろいろなものを振り返って、罪への悔い改めなども含めてこの詩篇を後に記したと、多くの人が考えています。これが、ダビデが詩篇34篇を記した背景でした。孤独な悲しみを覚えて、サウル王様にいのちをねらわれ、恐れ、戸惑いながら逃げて行く。そんな人生のどん底に置かれていた人物が、その中から助け出されて、どのようにして神様を見上げて歩んだのか、そのことを彼は教えてくれるのです。もちろん今見たようにダビデも

完璧な人物ではありませんでした。罪を犯すことがありました。神様ではなく、人を恐れることがありました。でも、そんな彼が悔い改め、困難に直面する中で、神様のうちに彼は喜びや希望を見出したのです。彼が見出すことのできたその喜びや希望というものは、私たちが困難に直面する時にも見出すことができるのです。私たちが彼のその姿から学ぶことはたくさんあるのです。

○恐怖から助け出された者のささげる歌：四つの教え

少し背景の説明が長くなりましたけれども、詩篇34篇の内容を実際に学んでいきたいと思います。この詩篇を通してダビデは、自分自身の経験を踏まえて四つのことを私たちに教えてくれます。恐怖から助け出された者が記したその歌、その中に見られる四つの教えです。

1. 主にいつも賛美をささげる 1-3節

さて、まず一つ目の教えが1-3節に記されていました。このようにダビデは詩篇を始めます。「1 私はあらゆる時に【主】をほめたたえる。私の口には、いつも、主への賛美がある。:2 私のたましいは【主】を誇る。貧しい者はそれを聞いて喜ぶ。:3 私とともに【主】をほめよ。共に、御名をあがめよう。」と。ダビデが一つ目に教えてくれていたことは驚きかもしれません。それは主にいつも賛美をささげるということでした。ダビデはどんな状況に置かれることがあろうと、良い時だろうが、悪い時だろうが、ただ主に向かって自分はほめ歌をささげるのだと心に決めていたのです。そう口にしていたのです。

◎ダビデの賛美の特徴

ここで注目してほしい点が三つあります。彼の賛美には少なくとも三つの特徴を見ることができました。

①ダビデの賛美の対象

一体ダビデはだれに向かって賛美をしていたのか、それはほかのだれでもない神様に対してでした。1-3節をよく見てみると、彼はここで「【主】をほめたたえる」、「主への賛美がある」、「【主】を誇る」、「【主】をほめよ」と、【主】ということばが何度も何度も繰り返されていました。また特にここで彼は三度にわたって、太文字の【主】を用いていたのです。この【主】が用いられているということは、これは神様の個人的な名である“ヤハウエ”のことを表しているということです。つまり、ダビデは自分自身とも個人的な関係にある神様に向かって、永遠に変わることのない全知全能ですべてを支配されている主権者、恵みとあわれみに富んだ偉大なる神様の姿に心を留めて、その神様だけを見上げて、彼は心からの賛美を、心からの感謝をささげていたということです。

②ダビデの賛美の頻度

どれぐらいの頻度でダビデは主をほめたたえていたのか——。それは継続的で、持続的なものでした。彼は1節で、「私はあらゆる時に【主】をほめたたえる」、また続きでも「私の口には、いつも、主への賛美がある」と言っていました。「あらゆる時」、「いつも」と言った時はどれぐらいの頻度を表しているでしょう？それはもちろん「いつも」はいつもですよ？つまり、自分の歩みのうちに何が起ころうとも、たとえ困難が降りかかってきて、何かを自分が犠牲にしなくてはならなかったとしても、どんな状況にあろうとも、主への賛美がその口にはあると言うのです。このことばを記した時の彼の置かれていた状況を整理してみると、アキシュ王の前から何とか逃れて、恐らくほら穴の中にいました。確かに一難は去ったのかもしれませんが、でもその状況は変わらずひどく苦しいものでした。相変わらずダビデは孤独でしたし、何よりもサウルとその使者たちにいのちをねらわれ続けていたのです。先のことなど彼には全くわかりませんでした。もし私たちが彼の立場に置かれたとしたら、そんな状況の中でどうふるまおうとするのでしょうか？自分自身の身に深刻な問題が降りかかってきていて、先に何が起ころうのかもわからなくて、周りに頼りにできる人もいない、そんな状況の中で、果たして私たちは神様を見上げて、この方に変わらない賛美をささげようとするのでしょうか？

③ダビデの賛美の範囲

簡潔に言うと、ダビデの賛美は個人的なものではなくて、会衆的なものでした。言い換えれば、ダビデの賛美は、自分ひとりだけが神様をほめたたえていけばいいと考えてはいなかったということです。彼は自分自身の知っているすばらしい神様を、ただ自分のうちにのみとどめておこうとは全くしていませんでした。私たちが個人的に神様をほめたたえることももちろん大切なことです。ダビデもその大切さはもちろん知っていました。それでもなおダビデはそこでとどまるのではなくて、自分自身が経験したこと、自分自身が神様の偉大さを見たことを自分のうちでとどめるのではなくて、喜んでみずから進んで、ほかの人と分かち合おうとしたのです。そのことは2-3節にはっきりと書いていました。「:2 私のためしいは【主】を誇る。貧しい者はそれを聞いて喜ぶ。:3 私とともに【主】をほめよ。共に、御名をあがめよう。」とあります。もちろん賛美は自分ひとりでもできるけれども、ともにそれをしようと。感謝なことがあれば、それをともに感謝しようと。主を誇るのであれば、ともにそれをしようと。そうしたら、ほかの人の励ましにもなる、ほかの人にとっての感謝にもなる。だから、それを一緒にしようと。ダビデはそのようにして、個人的に賛美をささげていただけではなくて、人々とともにそれをささげようとしていました。

三つをまとめると、ダビデの賛美というのは、神様にのみ心を向けて、どんな状況であろうと、そしてひとりだけではなくて、多くの者たちが一緒になってしようとするものだったということです。それが、ダビデが私たちに教えてくれていた賛美の姿勢でした。

2. 主に絶えず祈り求めること 4-10節

続けて、二つ目の教えが4-10節に記されていました。二つ目は主に絶えず祈り求めることです。4-6節に「:4 私が【主】を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してください。:5 彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。「彼らの顔ははずかしめないでください。」:6 この悩む者が呼ばわれたとき、【主】は聞かれた。こうして、主はすべての苦しみから彼を救われた。」と書かれていました。さて、1-3節で主に賛美をささげることについて教えてくれていたダビデは、自分自身が経験したこと、自分自身が学んだことをあかしとして、4節以降で私たちに伝えてくれていました。

1) 神様に信頼することの幸い

一体どんなことを彼が味わったのか、どうして彼が神様に向かってどんな時も賛美しようとしていたのか、彼は4節で「私が【主】を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してください」と言うのです。ダビデが置かれていた状況を思い返してみると、ダビデはこの時、数多くの恐怖を覚え、恐怖によって逃げ回っていたのです。自分のいのちをねらうサウル王様とその追手におびえていた彼は、まずノブの地へと逃れて行きました。そして、そこからさらにガテの地へと逃げて行くのです。ガテの地ではかつての敵たちに見つかって、アキシュ王の前に連れ出されることもありました。そこでは気が狂ったかのようにふるまったのです。逃げ惑う彼の心のうちには、間違いなく不安や失意、恐れや絶望、いろいろな感情、思いがいっぱいになっていたでしょう。考えてみれば、食べ物や武器もまともになかったのです。自分が何も持っていない状態で、この先、生きていくことができるのだろうか、もしこれから先もサウル王様が自分のことを変わらずねたみ続けて、いつまでもいのちをねらわれ続けるようなことがあったらどうしよう。アキシュ王様が自分のことを捕らえて、かつての英雄ゴリアテのあだ討ちだと言って、拷問され、殺されるようなことがあったらどうしよう。ダビデの心のうちに恐れを抱かせるような問題はたくさんありました。

ダビデは実際に見える問題だけではなくて、先が見えない状況に置かれていたことによっても心が苦しめられていたのです。そんな先が見えないという苦しみは、私たちにもよく理解できます。確かに今まさに味わっている見える苦しみや困難、苦痛というものも、私たちの心を大いにざわつかせて、大きな悲しみや痛みをもたらすものに間違いはありません。でも、その苦痛がいつまで続くかわからない、先が全く見えないとなってしまうと、それと同じかそれ以上に私たちはひどい恐れを抱いて、その状況

に希望を見出すことができなくなってしまうたりするのです。ダビデは先が見えない、いつまで続くかわからないような苦しみを味わっていました。いろいろなものを恐れて逃げ惑っていたのです。では、そんな希望を見出すことのできない絶望的な状況の中で、ダビデは一体何をしたのでしょうか？そのことを4節に書いていました。4節で彼がしていたことは、ただ神様を祈り求めることでした。自分の手には負えないような、自分の手ではどうすることもできない状況を抱えていたダビデは、神様を見上げました。この方の助けを求めて、この方を信頼して、すべてを委ねたのです。すると、神様はその祈りに答えられました。すべての恐怖から彼を救い出してくださったのです。どんなにダビデにとって大きな問題であろうとも、神様にとって大き過ぎる問題などいっさいなかったのです。

また4節だけではなくて、6節でもダビデは同じことを言っていました。6節「この悩む者が呼ばわれたとき、【主】は聞かれた。こうして、主はすべての苦しみから彼を救われた。」と。ダビデはここで自分自身のことを「悩む者」と表現していました。この「悩む者」ということばには「へりくだった」とか、「謙遜な者」という意味だけではなくて、だれかによって「しいたげられた者」、「惨めで弱い者」といった意味もあります。だれかにしいたげられることで弱りきってしまうような者のことです。つまりダビデはここで、自分自身のことを表す時に、誇り高ぶって自分自身のことを言い表そうとはしていなかったということです。もっと言うのであれば、彼は自分自身に知恵があったから、自分自身が力強かったから、自分自身がどんな時も主を疑うことなく歩んできたから、神様は自分を苦しみから救い出してくださったとは決して言っていなかったということです。ダビデは自分自身が悩む者であることをわかっていました。彼は自分自身が恐れや不安を覚えるような存在であること、神様以外のところに、自分の力で助けを見出そうとしていた時はいろいろな弱さを覚えていた、そんな存在であること、そして神様以外にはどこにも助けを見出すことのできない存在であることを、彼は自分のこととして認めていたのです。そんなへりくだって主を呼ぶその声を、神様は聞かれて助けを与えられました。「悩む者が呼ばわれたとき、【主】は聞かれた。……主はすべての苦しみから彼を救われた」と。

このことを考える時に、私たちにとってもこれは大きな励ましになります。それは私たち自身が困難に直面する多くの場面で、恐れや不安を抱いてしまうことがありますよね？本当に神様は祈りを聞いてくださるのだろうかという疑問もあるでしょう。私たちもみんな弱さや愚かさというものを今も持っているのです。でも、そんな悩む者の祈りを神様は聞いてくださると言うのです。神様は人を恐れて逃げ惑っていた、気が狂ったかのようなふるまいをしたダビデの祈りも聞かれました。だとすれば、いろいろな弱さを抱えた私たちも、同じように主の前にへりくだって、この方に祈り求めることができるのです。主に信頼する者は決して恥をかくことがないと神様が約束してくださっている。そう約束してくださっている方に、私たちはすべてを委ねることができるのです。幸いなことだと思いませんか？

2) 神様の守りの幸い

でも、ダビデはここでそれだけ話していたのではありませんでした。ダビデは神様に信頼するということがいかに幸いなことなのかということだけではなくて、もう一つ幸いなすばらしい理由をここで述べるのです。そのことが7節に「【主】の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。」と記されています。ここで「【主】の使い」ということばが出てきていました。これがだれを指しているのかについては、本当にいろいろな考え方があります。ある人たちはこれが神様ご自身のことを表していると考えていたり、ある人たちはこれが受肉前のイエス・キリストの姿を表していると言っている人もいます。この点に関して、詳しいことは幾らでも言えますけれども、またの機会に学ぶことができればと思います。きょう皆さんにここで押さえてほしいポイントは、「【主】の使い」というのがどんなものであったとしても、主を恐れる者のことをほかのだれでもない神様が守っていてくださるということです。主を恐れる者の周りに神様が陣を張ってくださり、その者を助け出してくださるということです。まるで力強い軍が陣を周りに張っているように、神様は主を恐れて神様のことを信頼する者

のことを、その偉大な力でもって助け出してくださる、守ってくださるのだとダビデは自分のこととして経験しました。そしてそのことをほかの人々にも伝えるのです。神様の救いのすばらしさというものを、彼は個人的なものとして経験しました。そしてそれがいかにすばらしいことなのか、いかに最高の喜びなのかということを知ったからこそ、彼はほかの人にもそれを味わってほしいと願うのです。

だから8-10節で「:8 【主】のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。:9 【主】を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には足りないことはないからだ。:10 若い獅子も足りなくなって飢える。しかし、【主】を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。」と続いていました。ダビデはかつて神様ではなくて、人を恐れていました。神様に従ってこの方に身を避けるのではなくて、何とか自分の知恵や力に抛り頼もうとすることもあったのです。その結果、どうなったかと言うと、彼はますます恐れを抱いて、彼のうちにはいっさいの平安や慰め、満足を見出すことができなかつたのです。そんな彼が神様のうちに助けを祈り求めて、この方の守りを経験し、そのすばらしさを味わった時に、彼は「幸いなことよ。彼に身を避ける者は。」と口にするのです。かつて自分はそこから離れていたけれども、でもやっぱりそこが一番すばらしい、主に信頼して主に身を避けるということはなんて幸いなことなのだ、どんな時も主に身を委ねることができるというのは、なんて私たちにとって大きな喜びなのだ。ダビデはそのことを知識として知っていたのではなく、自分のこととして味わいました。ダビデは困難を通して、神様の偉大さをますます知ったのです。

では私たちはどうでしょうか？私たちはひとりひとり、この神様に身を委ねること、身を避けるということの喜びを本当に自分のこととして知っているのでしょうか？確かに私たちこのようにして日曜日に礼拝に集って来たり、それぞれがデボーションをもったり、いろいろなことを通して、主に信頼することが幸いなのだということのみことばが教えていることは知識としては知っているでしょう。例えば詩篇40:4には、「幸いなことよ。【主】に信頼し、高ぶる者や、偽りに陥る者たちのほうに向かなかつた、その人は。」、詩篇84:12には、「万軍の【主】よ。なんと幸いなことでしょう。あなたに信頼するその人は。」と。みことばはこうやって繰り返し、主に信頼することがその人にとって最高の喜びなのだを教えていることを私たちは知識としては知っているかもしれませんが。問題は、それを個人的に味わっているかどうかです。もし味わっていないのであれば、ダビデは教えてくれるのです、励ましてくれるのです。自分の知恵や力に頼るのはやめなさい。神様に信頼すること、それがあなたにとって最高のことなのだ。先が見えない中で恐れを抱くのではなくて、すべてを支配されているその方に委ねなさい、それこそが私たちにとって最高の喜びであり、最高の幸せなのだ。ダビデはそうやって、神様がどのようなお方なのか、神様に身を委ねるといことがどれほどすばらしいことなのかを試練を通して学びました。彼は困難の中で、主に信頼することを学びました。

私たちが試練を経験する時に、いろいろな難しさを覚える時に一つ覚えておかないといけないことは、その時にこそ、私たちは神様を知ることができるということです。それが一つの私たちの学びの、レッスンの機会になるのです。そのような時でなければ、私たちは自分の力に頼ろうとします。でも、試練を通る時に、自分の力がもう何もないと気づかされる時に、私たちは神様を見上げようとするのです。ですから、どのようにして私たちが困難に向き合っているのかということをよく考えなければいけないことになるのです。もし私たちがそのような中で、神様を見上げることをしていないのであれば、もしかしたらとても大切な学びの機会を私たちは逃しているのかもしれませんが。ダビデはそのような形で個人的に神様を学びました。私たちもそれを学ぶことができます。そしてそれが最高の喜びなのだ。ダビデは教えてくれているのです。

3) 主を恐れることの幸い

またその後、ダビデは主に身を避けるということが幸いだけでなく、主を恐れるということにある幸いにも触れていました。そのことが9節から出ています。「:9 **【主】を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。:10 若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、【主】を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。」**と。ここで覚えてほしいことは、急にダビデが若い獅子、若いライオンの例えを使っていたということです。なぜかという、想像できると思いますけれども、若いライオンというのは非常に力が強くて、獲物を捕るためなら素早く動くことができます。ですから、若いライオンというものは獲物に困ること、食物に飢えることがほとんどないのです。でも、たとえそんなライオンが食物に困って飢えることがあったとしても、ダビデが言うのは、主を尋ね求める者は、主を恐れる者は神様に守られ、必要な物を備えられるということです。だから神様に信頼することが、神様を恐れることが私たちにとってすばらしいのだと彼は教えてくれていました。もちろんここで良いものが与えられると言った時に、私たちが欲しい物が与えられるという話をしているのではありません。私たちにとって必要な物を神様が必要なタイミングで与えてくださるのです。

3. 主を正しく恐れる 11-14節

三つ目にダビデが教えてくれていたことが、続く11-14節に記されていました。それは主を正しく恐れるということです。11-14節でダビデは、「:11 来なさい。子たちよ。私に聞きなさい。**【主】を恐れることを教えよう。:12 いのちを喜びとし、しあわせを見ようと、日数の多いのを愛する人は、だれか。:13 あなたの舌に悪口を言わせず、くちびるに欺きを語らせるな。:14 悪を離れ、善を行え。平和を求め、それを追い求めよ。」**と述べていました。今のところを読んで、ある人は気づかれたかもしれません。これまでに見てきた1-10節とは少し雰囲気が変わっていました。それはそのとおりで、ダビデは11節のところからまるで箴言を読んでいるかのように、主に従う者たちに対して必要な知恵、必要な訓戒を与えようとするのです。特にここでは大きく二つのことが主を恐れるということに関して挙げられていました。11節をもう一度見ると、「来なさい。子たちよ。私に聞きなさい。**【主】を恐れることを教えよう。」**とあります。主を恐れることとは――

1) ことば

まず一つ目にダビデが挙げていたことは、13節、ことばに関してでした。ダビデは13節で「**あなたの舌に悪口を言わせず、くちびるに欺きを語らせるな**」と教えるのです。困難や問題に私たちが直面する時に、いろいろな面で失敗してしまうことはありますけれども、その中で一番失敗するのは、もしかしたらことばかもしれません。自分の思いどおりにならなければ、私たちはすぐに不平不満を口にするかもしれませんし、神様に対してつぶやくかもしれません。一体いつまでこのような問題に向き合わなければいけないのですかと文句を言うかもしれません。そんなことばの抱えている問題というものをダビデもよくわかっていました。思い返してみれば、彼自身もアヒメレクに対してうそを重ねることがあったのです。そんな彼も神様の前に真実を語ることの大切さを学んだがゆえに、以前の罪を悔い改めました。そして自分と同じ過ちをほかの人々が犯さないように、自分と同じように唇に欺きを語らせることがないように、人々が主を恐れて悪口を語らず、欺きを口にしないようにと教えるのです。

2) 行動

また、もう一つは行動に関してでした。ダビデはことばだけでなく、行動に関しても触れています。14節に「**悪を離れ、善を行え。平和を求め、それを追い求めよ。」**と書いていました。私たちはことばだけでなく、私たちの行動というものも苦難の中で試されることが多々あります。私たちが苦しみを味わう中で、時に自分の目が神様もしくは周りの人ではなくて、自分自身に向いてしまうことがあったりするでしょう。ダビデにもそんな誘惑はありました。彼はねたみによって自分のいのちをねらうサウル王様のことを恨んで、彼に対して悪を行うこともできたのです。実際、ダビデは彼を捕まえにやって来たサウル王様を撃ち殺す機会にこの後2回出くわすこともありました。しかし、そのような場面

にあっても、彼は自分の思いを優先したり、自分の利益のために罪を犯そうとはしなかったのです。むしろこんなことばを自分の部下に語っていました。Ⅰサムエル24：6に「彼は部下に言った。「私が、主に逆らって、【主】に油そそがれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、【主】の前に絶対にできないことだ。彼は【主】に油そそがれた方だから。」」とあります。ダビデは正しい恐れを持っていました。だから、彼の焦点はどこに向いています？自分は主に逆らうことはできない、自分は主の前に絶対にできないことはしないと、神様の前に喜ばれることだけをダビデは選択しようとしていました。もちろん、彼も決して完璧な人物ではありませんでしたけれども、罪を犯せばそれを悔い改めて、そしていつも彼は主のみこころを追い求めて歩もうとしました。主を正しく恐れて生きる、そんな彼のことを神様も喜ばれていたのです。

4. 主のうちに希望を見続けること 15－22節

四つ目の教えが15－22節に記されていました。それは主のうちに希望を見続けることです。彼は15節からこのように続けていました。「:15 【主】の目は正しい者に向き、その耳は彼らの叫びに傾けられる。:16 【主】の御顔は悪をなす者からそむけられ、彼らの記憶を地から消される。:17 彼らが叫ぶと、【主】は聞いてくださる。そして、彼らをそのすべての苦しみから救い出される。:18 【主】は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、霊の砕かれた者を救われる。:19 正しい者の悩みは多い。しかし、【主】はそのすべてから彼を救い出される。:20 主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、砕かれることはない。:21 悪は悪者を殺し、正しい者を憎む者は罪に定められる。:22 【主】はそのしもべのたましいを贖い出される。主に身を避ける者は、だれも罪に定められない。」と。いろいろなことが言えますが、一つの表現に注目して見てください。ダビデは19節で「正しい者の悩みは多い」と言っていました。まさにそのとおりですよ？神様は神様を信じ受け入れて歩んでいる者たちに対して、何の問題もない、何の苦しみもない人生を約束されていたのではありませんでした。すべてが思いどおりに行って、順風満帆に行くことを、幾ら私たちが望んでいたとしても、現実はそうはいかないことを私たちはよく知っています。そこには悲しみがあったり、痛みがあったり、苦しみがあたりするのです。ダビデの人生もまさにそのようなものでした。彼は、この詩篇を記した時にはまだほら穴にいたのです。食べ物や武器も十分に持たないで、サウル王には変わらずいのちをねらわれていました。また、この先の彼の人生を見ていく時に、私たちは彼がいろいろな敵からその身を追われたり、友人にさえ裏切られることも多々あったことを見て取ることができます。彼の人生は文字どおり苦難の連続だったのです。しかし、そんな中であろうとも、彼はいつも主のうちに希望を見出して歩み続けることができました。なぜそれができたのか、その答えを19節に書いていたのです。19節に「正しい者の悩みは多い。しかし、【主】はそのすべてから彼を救い出される。」と書いていました。悩みが多い中であって、なぜ神様が正しい者がいつも希望を持って歩めるのか？それは神様がそんな者たちのために、すべてのものから助け出してく下さる、救い出してく下さるお方だと、ダビデが知っていたからでした。もちろん神様がいつも私たちの願うタイミングで救い出してく下さるかどうかはわかりませんが、私たちが思い描いているような方法で救いをもたらしてくれるのかもわかりません。でもこの方は必ず正しい者に目を留められて、必ずその叫びに耳を傾けてくださるのです。この方は心砕かれた者たちと共にいて、いつも必要な守りを与えてくださる神様なのです。だからこそ、たとえ私たちがどんな状況に置かれることがあろうとも、そこから救い出すことができる力を持った神様に目を向けて、その神様に信頼すること、そしてそこに私たちは希望を見出すことができるのです。ここに私たちは決して変わることがない、あふれんばかりの喜びを、あふれんばかりの慰めを、そしてこの方に対する賛美を見出すことができるのです。

○結論：

さて、これが私たちに対して、ダビデが教えてくれていたことでした。きょう、私たちはダビデの姿を通して、特に実際に恐怖から助け出された者の姿を通して四つのことを学びました。彼は言うので

す。たとえどんな困難や苦しみが降りかかることがあろうとも、私たちはいつも主に賛美をささげることができ、主に絶えず祈ることができ、主に正しく恐れを抱き、主のうちに希望を見続けることができます。私たちは周りでいろいろな変化が起こっていたとしても、決して変わることはない主権者なる神様に身を委ねて歩いていくことができる、その幸いを与えられているのです。

でも、もしまだ皆さんの中で、余りにも自分の経験していることが辛くて、神様がすべてを支配しておられるということを信じるのに難しさを覚えるような方がおられるのであれば、最後にもう一度だけ20節のところから見てください。「主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、砕かれることはない。」と書いていました。ダビデは、この20節の中では、神様が正しい者の悩みを守ってくださって、この方に信頼する自分の骨を神様が守ってくださる、神様の守りのことを教えていたのですが、この箇所読んで何かぴんときませんか？ヨハネの福音書19章に引用されているのです。ヨハネ19：31に「:31 その日は備え日であったため、ユダヤ人たちは安息日に(その安息日は大いなる日であったので)、死体を十字架の上に残しておかないように、すねを折ってそれを取りのける処置をピラトに願った。:32 それで、兵士たちが来て、イエスといっしょに十字架につけられた第一の者と、もうひとりの者とのすねを折った。」、さて、どんな場面が描かれていたでしょう？ 私たちもよく知っている場面でした。イエス様とともに十字架につけられた者たちのすねを兵士たちがやって来て折ったのです。そうすることで、まだ生きていた彼らの死を早めて安息日が始まる前までに彼らを十字架から下ろして埋葬しようと考えていました。さて、ふたりのすねを負った兵士は、その後でイエス様の十字架のもとへとやって来ます。そしてその時のことが「:33 しかし、イエスのところに来ると、イエスがすでに死んでおられるのを認めたので、そのすねを折らなかつた。:34 しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。」と続けて書かれていました。兵士がやって来た時、イエス様はもうすでに亡くなっておられました。亡くなっておられたからこそ、そのすねを折る必要はなかつたのです。そしてその話の後で、ヨハネは36節でこの詩篇のことばを引用していました。「この事が起こったのは、「彼の骨は一つも砕かれない」という聖書のことばが成就するためであった。」と。驚くべきことが記されておりました。神の御子に対してなされたことは、すべて神様のご計画のうちに起こっていたことだったということです。一つの骨も砕かれなかつたのは、ただの偶然ではありませんでした。イエス・キリストがほかのふたりよりも偶然早くに息を引き取っていたのではありませんでした。この方は父なる神様のご計画に従って、みずからの意思で十字架にかかり、そしてみずからの意思でご自分のいのちをささげられたのです。

同じヨハネ10：17－18で、イエス様が十字架にかかるそのはるか前に、こんなことばを残していました。「:17 わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してください。:18 だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」と。私たちがイエス様の十字架のことを考える時に、確かにイエス様は弟子のひとりであるユダに裏切られて祭司長たちに引き渡されていきました。確かにイエス様はその法廷にあって、はっきりと無実であると判断されたにもかかわらず、民衆を恐れたピラトによって十字架へと引き渡されていきました。確かに人々があざわらう中であって、ローマの兵士たちによって、イエス様は十字架につけられていくのです。でも、これらはすべて偶然ではありませんでした。すべてが昔から、神様があらかじめ定めておられたそのご計画に沿ってなされたことに過ぎなかつたのです。なぜそれがなされたのかというと、本来であれば、生まれながらに自分の望むままを生き、創造主なる神様に逆らっていた私たちこそが受けるのがこの十字架でした。その罪ゆえに神様の御怒りを受けて当然だったのは私たちでした。でも、そんな私たちに、こんなどうしようもない私たちのような愚か者のために、ほかのだれでもないイエス様がみずから十字架にかかってくださり、私たちが受けるべきその罪の罰を代わりに受けてくださったのです。私たちが滅んで当然の罪人であった時に、キリストは進んで犠牲を払

ってくださいました。そしてこの方を信じ、受け入れた者に救いを備えてくださったのです。これこそが神様が示してくださった一方的な愛でしかありませんでした。

もしこの中に、まだ救い主である主イエス・キリストを知らない方がいるのであれば、このイエス・キリストの愛を知らない方がいるのであれば、きょうその方を知ってください。きょう、このイエス・キリストを知ってから帰ってください。神様は罪をそのまま放っておかれるお方ではありません。私たちがきょうずっと見てきた詩篇34：21にこんなことばが記されています。「**悪は悪者を殺し、正しい者を憎む者は罪に定められる**」と。神様は間違ったこと、神様ご自身に逆らうような罪人をそのまま放置して何もなしということは絶対にされることはありません。必ず、ひとりひとりが聖い神様の前に立って、その方の前に申し開きをする日がやってきます。ですから、もしまだこの方を知らないのであれば、この方の前に自分の罪を認めて、その罪を悔い改めてこの方にすべてを委ねて歩いていく。この方を主として、救い主として受け入れていない方がいるのであれば、きょうそのことをなしてください。そのことを心からおすすめします。

また、兄弟姉妹の皆さん、私たちが十字架を見上げる時に、そこに確かに偉大な神様の愛を見ることが出来ます。でも同時に、私たちはそこに必ずご計画をそのとおりに成し遂げられる神様の主権者なるみわざを見ることが出来るのです。神様が言われたことは、そのとおりにになりました。そこに私たちは希望を見出すことが出来ます。「**主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、砕かれることはない**」ということばは、イエス・キリストにあって成就しました。そして私たちがみことばを見る時に、みことばの中にいろいろなすばらしい約束を見ることが出来ます。この詩篇34篇の最後のところにも、こんなことばが記されていました。22節「**【主】はそのしもべのたましいを贖い出される。主に身を避ける者は、だれも罪に定められない**」と。似たことばがパウロによっても語られていました。ローマ8：1に「**こういふわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。**」とあります。私たちはイエス・キリストにあって、救いを得たのであれば二度と罪に定められることはない。その喜びを持って歩むことが出来ます。そのことばが確実なものだと、私たちは十字架を見上げる時に確信することが出来るのです。私たちはこの希望を持っているのだから、ダビデが言ってくれていたように、いつも賛美をささげて、絶えず祈りをもって、正しく主を恐れ、そしてこの方のうちにあるその希望を見続けて、歩み続ける者として歩いて行きましょう。